

高大連携支援事業における母性看護学の 体験学習プログラムとその効果

—— 高校生と看護学生の相互学習を通して ——

細川美千恵・高津三枝子・新 野 由 子

(受理日 2012 年 9 月 26 日, 受稿日 2012 年 12 月 13 日)

The Effect of Maternal Nursing Study Program for High School Students

—— Mutual Learning of Nursing Students with High School Students ——

Michie HOSOKAWA・Mieko TAKATSU・Yoshiko NIINO

(Received Sept. 26, 2012, Accepted Dec. 13, 2012)

はじめに

高崎健康福祉大学保健医療学部看護学科では、系列校となっている高崎健康福祉大学高崎高校との高大連携支援事業を担当して 5 年目となった。今までに基礎看護学などの看護専門領域に関する高校生を対象とした体験学習を実施しその有用性について報告がされている(縄 2010)。

高校生はライフサイクルから考えると思春期の終わりに差しかかった時期にあり、第 2 次性徴を経て身体の成熟にむけて体の変化が安定に近づく時期にある。この思春期の女性における健康課題として、性感染症、若年での妊娠、人工妊娠中絶などがあり、また成人期において乳幼児虐待が課題となっているなか、近年、中・高校生の親性準備性の育成の重要性が指摘され(伊藤 2003)、若い世代のうちから準備を整えていく必要性が生じている。このように、高校生

は身体的、精神的、社会的な発達を経験しながら、将来にむけての勉学に取り組み、進路を選択していく時期にある。また、高校生が卒業後の進路として看護学を志望する人が近年増加してきているが、看護学とはどのような学問か、また看護師とはどのような役割を持つのかをイメージできることは、進路を選択する高校生にとって重要である。加えて、日本は少子化社会となっており、妊婦や乳幼児との交流が少なくなっていることが考えられ、新しい生命がどのように誕生してくるのか、様々な人に支えられながら生まれた生命が育つということを理解することは、看護師を目指す高校生にとっても重要な学びであると考ええる。

そこで今回、母性看護学の体験学習を通して、高校生が看護について考え、看護学科での学生生活をイメージすることで、進路選択の一助となり学習への動機づけにつながることを目的として、学習プログラムを立案したので、その学

習プログラムと効果について報告する。

方 法

1. 立案した学習プログラム

1) テーマと取り組みの目標

「新しい命の誕生を支援する一妊産婦への看護、乳幼児への看護を体験してみよう!」をテーマとし、次の4つを取り組みの目標とした。第一に「妊婦の擬似体験を通して、正常な母子の変化について気づくことができる」、第二に「妊婦に対する看護技術を体験し、女性の体と健康管理に興味を持ち、母性看護の役割をイメージできる」、第三に「看護学と母性看護学の概要を理解し、将来の進路について考えることができる」、第四に「看護学科学生との交流を通して、看護学科での学生生活や学習活動を身近にイメージできる」である。

2) 実施日時、場所、担当者、参加者

実施日時は平成24年6月23日10時から11時45分までの約2時間で、高崎健康福祉大学5

号館2階母性・小児看護学実習室を会場として実施した。母性看護学教員3名と看護学科4年生8名がボランティアとして担当した。高崎健康福祉大学高崎高等学校2年生21名の参加があり、性別の内訳は男性1名、女性20名であった。

3) 指導計画と内容

全体の構成を講義、体験学習、看護学生との交流会の3部構成とし、その概要を表1に示す。

講義では看護師の担う役割と看護学を構成する看護専門領域、母性看護学の位置づけを解説し、カリキュラムの構成要素の理解を図った。母性看護学は女性のライフサイクルに沿った健康課題への支援を行うものであるが、その中でも新しい生命を育む妊婦への看護を学ぶことは、母性看護の役割に加えて、生命の誕生や尊厳について考え、将来自らが新しい生命を産み育てる立場になることを意識する機会になると考え、妊婦への看護を中心に引き上げた。具体的には、高校生にとってイメージしやすいように妊娠の経過を説明し、妊娠を順調に経過させ

表1 母性看護学に関する体験学習プログラム

段階	時間配分	内容
導 入	9:50~(10分)	あいさつ、スケジュール説明
展 開 1	10:00~(20分)	【講義】 1. 看護とは、母性看護学の位置づけ 2. 妊娠、分娩、妊婦の体重増加、栄養の重要性 3. 妊婦に対する看護技術
展 開 2	① 10:20~ ② 10:35~ ③ 10:50~(各15分)	【体験学習】 1. 妊婦体験ジャケットの装着(学生4人、教員1人) ・靴下の着脱、階段昇降 2. 妊婦健診(腹部触診、胎児心音聴取)(学生3人、教員1人) 3. 資料展示(学生1人、教員1人) ・分娩場面の紹介、月経に関するセルフケア用具 ・婦人体温計、基礎体温の説明、等
展 開 3	11:10~(30分)	【交流会】 司会:学生3グループに分かれて着席(学生2、3、3人ずつ着席) 内容:看護学科を選んだ理由、学生生活の紹介、看護学科で学んでよかったこと、大変と感ずること、卒業後に目指していること。高校生からの質問。
終 末	11:40~45(5分)	まとめ

るための日常生活の方法について解説した。

体験学習では妊婦体験ジャケットの着用、妊婦腹部触診モデルを用いた妊婦健康診査の体験、出産と月経に関するセルフケアのポスターと資料展示の3つのコーナーを設定した。参加した高校生がすべてのコーナーを体験できるように、参加者を3グループに分け、各コーナー15分ずつでローテーションした。各コーナーでは看護学生が中心となって解説を行った。妊婦体験ジャケットの着用では、妊婦の体型の変化と日常動作への影響を体験してもらうことで、その大変さを実感しながら、妊婦への支援の必要性和看護師の役割に気付いてもらうことを意図した。妊婦健康診査のコーナーでは、妊婦腹部モデルを用いて、妊婦の腹部の触診と胎児心拍の聴診を体験し子宮内にいる胎児の存在を感じながら、妊婦の気持ちを配慮した妊婦健康診査における看護師の役割のイメージを図った。出産と月経に関する資料展示では、出産の写真の展示と月経の仕組みについての解説を行い、思春期からの女性の健康管理の必要性を理解できるようにした。

看護学生との交流会では、高校生6～7名と看護学生2～3名からなる3グループに分かれ30分間で計画した。交流会では看護学生が看護学科での学習内容、4年間のスケジュール、将来の進路を説明しながら、随時高校生からの質問に回答する会話形式で行うこととした。

4) 担当者の役割分担

今回担当した教員と看護学生の役割分担に関するイメージを図1に示す。看護学生の役割は、3箇所の体験学習での説明と高校生との交流会の運営とし、事前に教員が看護学生にオリエンテーションを行った。体験学習については教員が作成したシナリオを用いてリハーサルをして

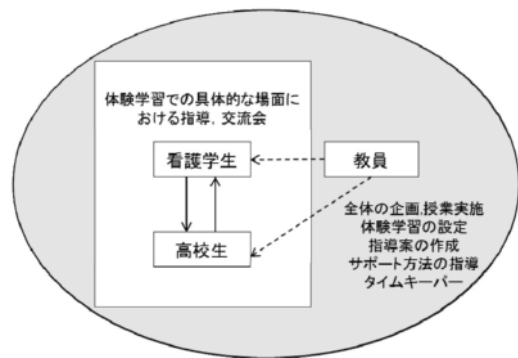


図1 学習プログラムにおける看護学生と教員の役割

から実際の体験学習を担当した。

2. 評価方法

参加した高校生21名とボランティアとして関わった看護学科4年生8名を対象にしてプログラム終了時に無記名の自己記入式アンケート調査を配布し、その場で回収した。

高校生に対する調査項目は、参加した理由、模擬授業、演習、先輩との交流会それぞれの感想である。また①内容に興味を持てたか、②妊娠経過と体の変化をイメージできたか、③教員や学生とのコミュニケーションが取れたか、④看護/母性看護学に対する興味を持てたか、⑤母性看護学の持つ役割をイメージできたか、⑥進路の選択肢の一つとして看護学を選びたいと思うか、⑦女性の体について理解でき大切にしたと思ったか、⑧同じような機会があれば参加したいと思ったか、という質問に対して、とてもそう思う、そう思う、思わない、まったく思わない、の4段階のリッカート尺度に回答してもらった。

看護学生に対しての調査項目は①高校生とのコミュニケーションが取れたか、②高校生に教えることができたか、③高校生のサポートがで

きたか、④自分に自信が持てたか、⑤参加して良かったか、⑥今後の学習に役立ったか、という質問に対して、とてもそう思う、そう思う、思わない、まったく思わない、の4段階のリッカート尺度に回答をしてもらった。また、体験学習の担当、高校生との交流会、全体を通しての感想や意見を記載してもらった。

結 果

1. 高校生のアンケートに対する回答より

妊婦体験ジャケットを体験した感想としては、「思った以上に重かった。まわりに妊婦さんがいたら助けたいと思いました」、「自分の母の辛さがわかった。病院でも積極的にだんなさんにジャケットを着させる機会をもたせるべきだと思った」等の感想があった。高校生は妊婦の大変さについてイメージはしていたが、正常な母子の変化について体験を通して実感することができ、今後身の周りにいる妊婦さんに手助けをしていきたい、夫に対しても理解を図る必要があるなど、自分たちが援助するものとしての

意識を持つことができていた。

妊婦の看護を体験した感想として「小さな命でも一生懸命、生きているのだと思った」、「ただ触るだけではなくて、お母さんの気持ちも考えなくてはならないなど、意外と大変なんだなと思いました」、「さわっただけで子宮がどこまであるかとかを判断するのはむずかしかったです。でも、とても良い経験になりました」などがあげられていた。高校生にとって、胎児心音聴取の看護技術体験は、胎児心音のリズムの速さに驚き、胎児の生命力を感じ、新しい生命の始まりを考えるような体験になったと考える。また、妊婦の腹部触診の体験では、ケアを受ける妊婦の気持ちを考え配慮しながら触診することと同時に胎児の子宮内での姿勢や向き、成長を判断することを経験し、看護師のケア体験に満足感を示していた。

先輩にあたる看護学科4年生との交流会の感想(表2)には、「学校での生活の様子や授業の内容を聞いて良かったです。看護学を学んでみたいと思う気持ちが強まりました」、「大変さもすごく伝わったけど、それ以上にやりがいのあ

表2 高校生が看護学生との交流会を体験した感想(抜粋)

番号	感 想
1	場を盛り上げてくれたので楽しくお話しできた。こういうコミュニケーションの能力も必要だと思った。
2	先輩がとても気さくに分かりやすくいろいろと教えてくれて、より看護に心がひかれるようになりました。
4	実習の内容や生活がよくわかった。
7	実習の話などを聞き、改めて看護の仕事に興味がわきました。
9	思うように質問とかできず、あんまり話せなかったけど、大学生活や4年間を通しての看護学科の生活などを聞いて良かったです。
11	疑問に思っていたことが分かったのがよかった。看護学科はとても大変そうだけど、やりがいがありそうで楽しそうだなって思った。とてもいい人たちで楽しかった。
13	なぜこの大学に進んだとか、自分のこと(を)話してくれてとても、良い参考になりました。
14	大変さもすごく伝わったけど、それ以上にやりがいのある仕事なんだと感じた。
15	たくさん質問に答えてくれた。大学についてなど生の声を聞くことができうれしかった。
16	たくさんお話しができてとてもよかったです。今後の進路決定の際に参考にできることをたくさん聞けました。
20	楽しかったです。実習やサークルについても面白く教えてくださって、健大の魅力が分かりました。
21	学校での生活の様子や授業の内容を聞いて良かったです。看護学を学んでみたいと思う気持ちが強まりました。

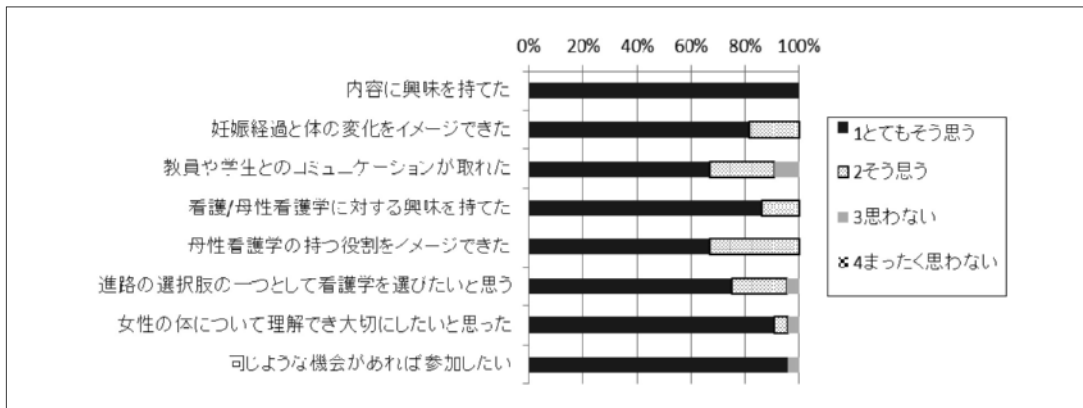


図2 高校生のアンケートに対する回答

る仕事なんだと感じた」などの感想が書かれていた。高校生は身近な存在である先輩の学生から進路選択の動機、学生生活、学習内容とその大変さ、看護師のやりがいなどを聞くことができ、看護学科での学生生活や学習活動を身近にイメージできることにつながっていた。

プログラム全体を通して「看護師は責任ある仕事だと思うけど、人と関わり、コミュニケーションをとるなかでたくさんのやりがいを感じることができる仕事だと思った。看護に興味を持つようになった」、「母性（看護）学の話は、将来役に立つことばかりで、とてもためになりました。妊婦体験や腹部触診は初めてだったけど、先輩が分かりやすく指導してくれて、良い体験になりました」、など母性看護学に関する体験学習と先輩との交流が将来の看護学を学んでみたいという興味や動機付けにつながっていたと言える。

図2に示した終了後のアンケート結果から、参加した高校生は看護・母性看護学に対する興味と看護学を進路の候補にしてみたいという興味を持ち、また、体験学習を通して、女性の体と健康管理に興味を持つことにつながっていたと言える。

2. 看護学生のアンケートに対する回答より

看護学生は体験学習を担当して(表3)、「母性看護学を振り返るきっかけになった。頭ではなんとなくわかっていることでも、人に教えることは難しいし、まだはつきりわかっていないのかなと思った」、「他人に教えることはすごく自分の力にもなるし、学びを深めることができたと思う。今回の経験は今後に生かせると思うので、また参加したり、今後に生かしたいと思う」など、既習の知識を復習し、高校生に教えるという経験を通して学びを深めることにつながっていた。

高校生との交流会を通して(表4)「どんなことが知りたいのか、自分が高校生の頃だったらどんなことを聞きたいのか考えたつもりだったけど難しいところもあった。リラックスした雰囲気であいあいと話せて良かったと思う」と将来の進路や看護の道を考えている高校生の気持ちや立場を考えながら、大学生として適切な関わりをしようと努力していたと言える。

全体を通して「高校生との関わりは自分の学びを深めるだけでなく、高校生の学びにつながったと思うので、貴重な経験ができ良かった」など、高校生と関わるにあたっての準備が4年

表3 看護学生が体験学習を担当した感想と学んだこと（抜粋）

番号	感想、学んだこと
1	母性看護学を振り返るきっかけになった。頭ではなんとなくわかっていることでも、人に教えることは難しいし、まだはっきりわかっていないのかなと思った。
2	実習で学んだこと等を高校生に伝える良い機会だと思った。担当していたところの学習を振り返る機会になった。
3	他人に教えることはすごく自分の力にもなるし、学びを深めることができたと思う。今回の経験は今後に生かせると思うので、また参加したり、今後に生かしたいと思う。
4	他者に教えるのに間違ったことを教えられないと再度復習を行ったため、学びが深まった。
5	楽しくできた。高校生の感じたことも聞けて良かった。
6	みんなが参加できるような配慮があまりできていなかったと思う。いつもは学ぶ側で、今回は今まで学んだこと感じたことを伝える側になり難しかった。
7	もっと説明がうまくできればよかった。
8	2年生のうちから進路を考えていて偉いと思った。少しでも看護師になろうというきっかけになったら嬉しい。

表4 高校生との交流会に関する看護学生の感想（抜粋）

番号	感想、学んだこと
1	2年生が多かったが、もうすでに看護師を目指している人が多かった。不安もあるということがわかった。
2	もう少し真面目な話をすれば良かったと思う。学生生活については良く話せたと思う。
3	初めは会話が途切れたりしたけど、後から高校生にも質問を受けて、いろいろ話すことができて良かったと思う。
4	まだ進路に悩んでいる子たちが少し大学進学後をイメージできていたようなので良かった。
5	高校生が話しやすい環境をつくってあげることが大切だと感じた。もっと固くならず話せたかなと思う。
6	どんなことが知りたいのか、自分が高校生の頃だったらどんなことを聞きたいのか考えたつもりだったけど難しいところもあった。リラックスした雰囲気できあいいと話せて良かったと思う。
7	積極的に聞いてきてくれて、うれしかったし、力になりたいと思った。

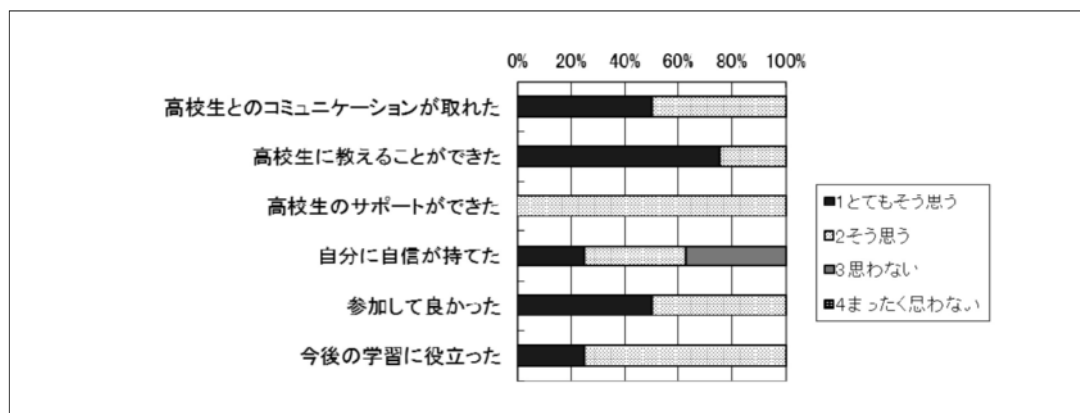


図3 看護学生のアンケートに対する回答

間の復習の機会になり、実際の交流が大学生にとって有意義な経験となっていたことを示す記載が見られていた。

図3に示したアンケート結果から、看護学生は高校生との交流を持ち、体験学習の内容を教

えることはでき、今後の学習に役立ったと感じていたが、高校生をサポートするという点、自分に自信が持てたとは感じたかという点の満足度が低かった。

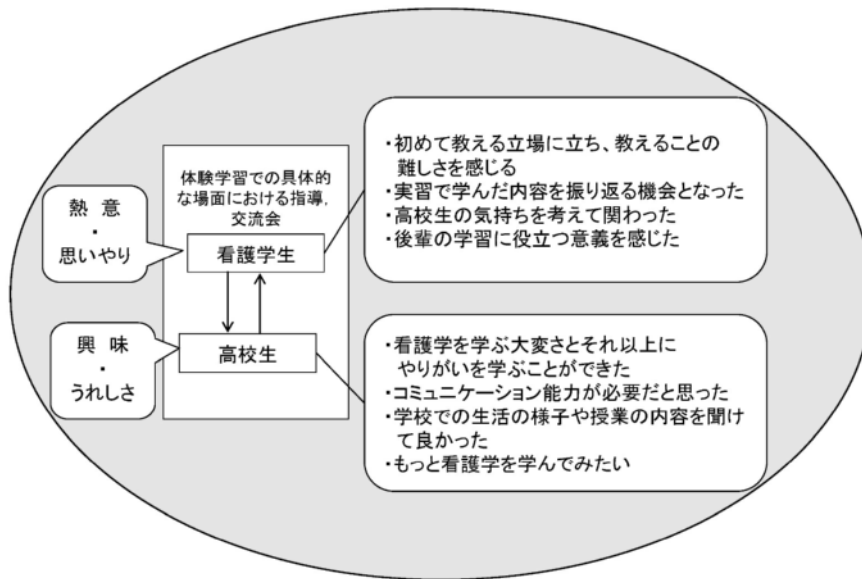


図4 高校生と看護学生の交流によって生じたそれぞれの反応

考 察

今回初めて高大連携支援事業において母性看護学の学習プログラムを立案し、実施した。母性看護学に関する講義、体験学習、看護学生との交流会から成り立つプログラム構成と時間配分は、高校生や看護学生の反応から適切であったと評価する。アンケートの結果から、立案した体験学習プログラムは、参加した高校生にとって興味深いもので、看護学や母性看護学に対する理解や関心が深まり、将来の進路を選択するために有用な機会となっていた。そして、プログラム立案時に設定した4つの取り組みの目標は到達できていたと評価する。今回は、妊娠期、分娩期の看護や女性の健康に関する学習内容としたが、新生児の育児に関する内容、例えば新生児の栄養や清潔ケアなどを取り入れた育児についての体験プログラムを取り入れ、効果を検討していくことが課題である。

今回の体験学習プログラムの効果は、何より

もボランティアとして参加した看護学生と高校生の相互作用によるものが大きいと考えられる。図4に示すように、高校生は看護学生から具体的な学習内容や学生生活を教えてもらい大変さ以上のやりがいを感じることができ、加えて看護学生の熱心な関わりにうれしさを感じ、看護学を学ぶことに興味を持てるようになっていたことが分かり、看護学生からは後輩である高校生を思いやり、看護学科で学んだことをしっかりと伝えようとする熱心さが感じられた。この2者の間に生じた相互関係において、大学生は宮内らの報告するような“一步前のメンター”（宮内 2012）として、高校生が将来どのような職業を選択するかに大きな影響を与えていたと考える。「メンター」という用語は、青年たちが大人の世界や仕事の世界をわたっていく上での術を学ぶのを支援する「より経験を積んだ年長者」を意味する言葉である。そのメンタリングの機能の一つに上位者の態度や価値観、行動が下位者のものが見習うモデルとなる

という、役割モデリングの機能があり、加えて、役割モデリングは情緒的愛着が成立してこそ成功すると言われている（キャッシュ 2003）。本プログラムにおいても、高校生と看護学生の間に情緒的愛着が形成され、看護学生は看護者としての態度や価値観、行動を示すことができ、役割モデリングとしての機能を果たすことができたと言える。

メンタリングの関係によってメンターは、他人を支援することを通じて、精神的な満足感や、教師ないしはアドバイザーとしての自分の能力に対する尊敬を獲得する。また関わりを通して自分の過去を見直し、再評価することにつながる（キャッシュ 2003）と言われている。今回の体験を通して、4年生の学生は、看護学を学んでいない高校生に対して初めて教える立場に立つことを経験し、講義や実習で教わったことを意味づけることにつながっていた。高校生との交流では、高校生が進路について悩んでいることを感じ取り、高校生がリラックスできるような雰囲気を作りながら、適切なアドバイスをすることができており、4年間で培ったコミュニケーションの能力を発揮し、自分なりの看護観を振り返る機会となっていた。看護学生は、自らが高校生だった時期を振り返りながら、4年間の学習を統合し学習成果を実感することのできた有意義な機会となっていたと言える。しかし、看護学生は自信を持って教えられたという実感を持てなかったようで、看護を他者に教えるという体験が初めてであることを踏まえ、事前のリハーサルをしっかり行う必要があったと考える。

高校生は妊婦の疑似体験を通して妊婦の大変さを実感して支援の必要性を考えることができていた。加えて妊婦の気持ちに配慮しながら観

察することを体験し、「気づかう」「心を配る」「関心を向ける」など心理的態度を取りながらケアを体験できており、今回の学習プログラムでは、ケアリングにつながる体験（秋元 2011）を高校生に提供できていたと考える。

看護学科は、国家資格である看護師免許の取得を目指すカリキュラムとなっており、学習内容が卒業後の職業と直結する学科である。よって、高校生は将来の自らの職業として看護職を選択することを高校生のうちに自己決定する必要がある。看護師の離職率だけでなく、大学卒業後の離職率の増加が指摘されている現在、看護職となることが自己実現につながるような職業の選択ができるように高校生に支援することが必要である。そこで、看護職の役割をイメージしてもらうことをねらいとした本プログラムにおいて、高校生は体験学習でのケアリング体験や看護学生との交流を通して、看護職の持つやりがいや責任を理解することができていた。具体的な目標は、あいまいなあるいは概略的な目標に比べて、より確実に活動を方向づけると言われており、そのためには効果的な目標の設定の重要性が述べられている（E.A. ロック 1984）が、本プログラムでは、高校生の進路選択と将来の目標設定につながる体験を提供できたのではないかと考える。

また今回、新しい生命の誕生をいかに支えていくのかという母性看護学の学習プログラムを通して、高校生は女性が新しい命を身に宿し、育み、産む力を持っていることを豊かな感性で感じとることができていた。そして、その力を発揮するために思春期から女性の健康管理が重要であることを理解でき、女性の健康に興味を持つことにつながっていた。核家族化、少子化が進んだ今日、子どもたちの生活体験が貧弱に

なっており、体験から学ぶ機会が減少していると言われている。また、子どもたちに必要な「生きる力」は、様々な体験や活動を通して育まれるため、子どもたちの体験機会の充実を図ることが課題となっている(生涯学習審議会 1999)。今回、新しい生命の誕生について感じ、考える機会を提供できたことは、将来親となる存在である高校生たちの親準備性に働きかけ、10代の若者たちが抱える性に関する課題と向き合うための材料となり、本プログラムの効果の一つであると考ええる。

おわりに

近年、看護師国家試験の合格者のうち、4年制大学出身者が2割を超えるようになった。このように、4年制大学で看護学を学びたいという高校生が増加している中で、高校生が目的を持って看護学科に入学し、職業的アイデンティ

ティを形づくっていけるように、今回のような学習プログラムが有用であると考ええる。

文献

- 1) 秋元典子 2011 看護の約束 命を守り、暮しを支える 171 頁
- 2) E.A. ロック, G.P. ラザム 1984 「目標が人を動かす 効果的な意欲づけの技法」28 頁
- 3) 伊藤葉子 2003 「中・高校生の親性準備性の発達」、『日本家政学会誌』第 54 号, 801-812 頁
- 4) キャシー・クラム, (訳) 渡辺直登, 伊藤知子 2003 「メンタリング」会社の中の発達支援関係, 2 頁
- 5) 生涯学習審議会 1999 「生活体験・自然体験が日本の子どもの心をはぐくむ」12-14 頁
- 6) 縄 秀志, 武田貴美子, 青木君恵, 吉田聡子 2010 「高校生のための看護ケア体験プログラムの有用性」、『高崎健康福祉大学紀要』第 9 号, 135-144 頁
- 7) 宮内 洋, 岡本祐子, 今井邦枝, 山西加織 2012 「短期大学部児童福祉学科における高大連携事業の取り組み―“一歩前のメンター”との共同体験からキャリアの可視化に向けて―」、『高崎健康福祉大学紀要』第 11 号, 261-268 頁